
追悼の記

本書刊行準備さなかの平成12年2月10日、宮田登氏が急逝された。昨年4月に、当館の客員教授（研究員）としてご着任以来、氏が提唱された「都市民俗学」を江戸・東京というフィールドでさらに深められるべく、さまざまな展望をもって意欲的に当館の事業に取り組みただけに、氏の突然の死は、大きな衝撃とともに、深い哀しみを私たち館員にもたらした。今回の特集は、宮田氏を新たに当館にお迎えしたことが直接の契機となっており、執筆者の選定など全般的に氏のご教示、ご助言を受けての編集作業であった。もちろん、氏にもご寄稿いただく予定であったが、残念ながらそれもかなわぬこととなってしまった。ここに深く哀悼の意を表するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げる。

編集後記

2000年を迎えた。今年で20世紀も終わろうとしている。今、われわれが日々を過ごしている東京は、この前の世紀末に人々が予想していた100年後の姿を、はるかに凌駕した「未来都市」であろう。科学技術は、人々の想像力を超えた速度で進み、その歩みを止めようとはしないが、そうした中で、いまだその力をもってしても解決し得ない不可思議な事象が存在していることも事実である。怪談や奇跡談の類が、日常的に様々なメディアを通して流布され続けているのは、あるいは想像性を求める人間というもの、まさに本能のなせるわざなのかもしれない。

本号では、「不思議を楽しむ—江戸のメディアと俗信—」と題して特集を編んだ。主として口承によって伝わっていった不思議のさまざまが、近世以降、刷物や錦絵、黄表紙、あるいは講談本といった出版物を通じて、人々の間にどのように広がり、受け入れられ、そして変容していったか、「有卦」「七不思議」「化物絵」という3つの視点から論考を寄せてもらった。

資料紹介としては、館蔵の「山形藩水野家奥日記」を掲載した。特集との関連を意識しての資料選択ではなかったのだが、日記中に有卦入に関する記述があり（元治元年11月15日の条）、はからずも特集に関わる資料を提示することになった。

また、新たな試みとして、今年度開催された当館の自主企画展の展示批評を掲載した。文中、さいたま文学館の宮瀧氏が指摘されているとおり、展覧会が学芸員の研究成果として正当に評価され、広く認知されるためにも、われわれ学芸員自身がこうした批評の機会にさらに積極的に身を投じていく必要がある。自戒の念をこめつつ。（N.I生）